

act 5

art, culture, tradition

[発行] 札幌市教育文化会館
アクト

JUNE 2011



狂言

KYŌGEN

狂言師は 人間ドラマの エキスパート



お金を立て替えたのに、相手はすっかりそれを忘れてる…。う～ん、直接言うのも嫌だし…なんて言おう。「あの家、最近たてかえたね!」「壁にほうきがたてかけてあるね!」…かけ言葉で伝える努力もむなしく、相手にはなかなか伝わらない…。狂言ふせないきょう「無布施経」を現代風に言い換えたらこんな感じの話。そう、狂言は特別な設定のお話ではなく、身近な出来事がおもしろおかしくドラマ仕立てになっているセリフ劇なのです。

セリフは室町時代の言葉だからしばしば「?」。だけど、600年前の人間が感じていたことは今も昔も変わらないみたい。おどけた仕草や、いかにも笑っている! という表情は、観ている人を満面の笑顔にしてくれます。長い長い時間をかけて、人を幸せにする人間ドラマを描いてきた狂言の世界。時には涙を誘い、人の情や夫婦の絆に心が温まる。難しいことなんか考えずに、古来から伝わってきた日本の芸に身を委ねてみませんか?

知っておこう！ 狂言の基本キャラクター

狂言の登場人物は、ほとんど決まった役名を持っていません。

人物の立場を表す呼び名があるだけ。

しかも、日常によくいるキャラなので、それさえ覚えてしまえば狂言の内容がぐーんとわかりやすくなります。

女房

なにかと口うるさい女として登場。夫には煙たがられるけど、世話焼きの優しい一面も。美男(ビナン)という白い布を頭に巻いているのが特徴です。

果報者

豪華な衣装を身にまとう、お金持ち。素袍(すおう)というたつぷりとした着物と長袴をつけています。

主人

地方の大家族なので、いまでいう中間管理職といったところ。教養はないけど人情に厚いキャラ。

太郎冠者・次郎冠者

狂言ではしょっちゅう出てくるキャラ。身分は高くなく、どこにでもいるサラリーマン的な存在。お酒好きだったり、迷惑な主人に振り回されたりと親しみやすい役柄で、ポップな絵柄の衣装をまとっています。部下や後輩といった感じで次郎冠者・三郎冠者が登場することもあり。

山伏

そもそもは悪霊を退治したり病気を治す法力などを使う修行僧。狂言ではその力を笠に着た横柄な山伏がやりこめられる展開が多く、社会風刺的な意味も込められています。

馬

人間以外のキャラたち

狂言に出てくる動物や神様は、やっぱりどこかユーモラス。お能の面にも似ているけれど、親しみやすく自由な発想のものが多いです。動物もイヌ、サル、ウマ、蚊、キツネとさまざま。動物シリーズで狂言を観るのも楽しいかも。

狐



狂言 KYŌGEN HISTORY

笑いの陰には苦勞あり。
可能性を秘めた伝統芸能です。

◆600年以上も前のパフォーマーたち

「狂言」という文字が初めて文献に現れたのは、いまからおよそ650年も昔の話。室町時代のことです。じゃあ室町時代から始まったのかな？というでもないんです。狂言と呼ばれる前には「猿楽」と呼ばれており、さらにその前には「散楽」と呼ばれていました。なんと奈良時代の話です。散楽は中国から入ってきたこっけいな芸や物まね、曲芸、奇術などさまざまな大衆的な大道芸の集まりのことで、いまでいうところのストリートパフォーマンス。当事はパフォーマーを育てる国立の養成所「散楽戸」というものまであったので、大衆にもウケた、なかなかの人気芸能だったようです。しかし、芸があまりに過激すぎたのか平安時代になると養成所は廃止に。行き場を失ったパフォーマーたちは、寺社と手を組むことにしました。今までのあっといわせる芸能に、寺社の祭事的な要素も盛り込んでいきます。このころにはすでに「猿楽」と呼ばれるようになっていました。

◆猿楽のスーパーstar、現る

猿楽には多彩な芸能が組み込まれていたので、演者たちも得意の分野でそれぞれ役割を持って均衡を保っていました。ですが、室町時代に入ると時の権力者・足利義満に見初められた観阿弥・世阿弥親子が強力な力を持つようになります。観阿弥・世阿弥親子の得意分野は「舞」。そのため猿楽はどんどん「幽玄」



な舞中心の能に近づいていきます。おかしさを楽しさをともなった台詞劇はそんな流れの中で「狂言」と呼ばれるようになり、能とは別の歴史を歩みはじめます。

◆国家公務員を経て、フリーの道へ

「能」と「狂言」に分かれ始めた猿楽ですが、その後江戸時代には徳川家康にもかわいがられ、ついに幕府の「式楽」つまり、幕府の正式な儀式の際に演じられる芸能に制定されたのです。大道芸人が国家公務員になるなんてまるで夢のよう。それまでは一般の民衆も猿楽を見ることができましたが、これ以降は庶民と隔てられた芸能として確立していきます。ところが！長い平穏のあと明治維新が起り、幕藩体制は崩壊。能狂言に関わるすべての人は職を失ってしまいました。明治以後は「能楽」という名前になり明治政府の政策によって復興しますが、華族や財閥のサロンで上演すると注目されるのは「能」ばかり。狂言の「笑い」という芸術性は理解されず、ついには断絶する流派も現れました。このまま狂言は息絶えてしまうのか…、という時に第二次世界大戦が勃発。敗戦後の日本は戦前の価値観を捨てようという風潮とともに、狂言師が演劇の舞台に出演したり新作狂言を上演するなどの新しい試みが認められ、狂言はみごとに復興を遂げました。大道芸から国家公務員へ、そしてふたたび一般の人々の目に触れる芸能へ。波乱万丈な歴史を持つ、強く優しい笑いの世界。これからまだまだ新しい発見があるかもしれません。

一つの芸能から生まれた二つの芸術

狂言と能、ふかーい関係

狂言も能も、能楽堂で上演される日本の伝統芸能。このふたつは一緒に上演されてはじめて「能楽」といわれます。(ちなみに、「能楽」はユネスコ無形文化遺産の傑作宣言に日本で初めて採択されました)多くの能は前半と後半に場面が分かれていて、その間をつないでいるのが狂言です。能の間に演じられる狂言は間(あい)

狂言といわれます。能とは別に独立した劇としての「狂言」の演目もあり、「本狂言」と呼ぶことも。狂言と能は劇の性質も表現の仕方も違いますが、もともとは中国から渡り来た大道芸「猿楽」が源流。おかしみを伝える「狂言」と人生の悲哀を表す「能」に分けることで、それぞれよりテーマに沿った芸を磨いていったのです。

ちが い	
面	
能	ほとんどのシテ(主人公)は面をつける。
狂言	メインキャラはほとんど直面※
劇の形態	
能	セリフはなく、舞と謡で表現する歌舞劇。
狂言	演劇のようにしゃべって劇が進む。小謡、小舞※もあるセリフ劇。

共通点 表現を極力抑えて「型」にし、観ている人の想像力を喚起することでより悲しく、より楽しく舞台がで上がっていく。

5分でわかる狂言の名作

狂言演目紹介

【かぎゅう】ことばがわからなくても、謡と舞だけで十分楽しめる。

蝸牛とは、カタツムリ・でんでん虫のこと。主人は太郎冠者に、長寿の薬であるカタツムリを捕ってこいと命じます。しかし、太郎冠者はカタツムリを知りません。主人に訊ねると、「藪(やぶ)に棲み、頭が黒く、腰に貝をつけ、ときどき角を出し、大きいものは人間ほどにもなる」といいます。その手がかりをもとに探し出かけた太郎冠者は、たまたま藪の中で昼寝をしていた山伏を発見。腰につけた貝や頭の黒い頭巾を見て、「カタツムリか?」と問うと、山伏はいたずら心から「そうだ!」と応えてしまいます。調子に乗った山伏は、雛子(はやし)がないと動かないと言い出し、太郎冠者を誑かせ、自分も踊り出します。そんな浮かれた二人のもとに、待ちきれなくなった主人が現れ…。リズムに乗って謡い踊る姿が、大人も子どもも楽しくさせるリズムカルな演目です。

みどころ

いまちがいや言葉遊びが大得意な狂言。ここでもカタツムリの特徴「藪に棲んでいる、頭が黒い、腰に貝をつけている」などなど、言葉どおりにとらえと、確かにまちがいではないのだけれど…という、太郎冠者の勘違いから話がどンドン変な方向に。謡い舞う太郎冠者と山伏の陽気さや、怒っていたはずの主も一緒に浮かれてしまうというエンディングも狂言ならではのほがらかさです。



【ぼうしぱり】禁じられたら、なおさら飲みたい。今も昔も変わらない酒飲みの姿をコミカルに表現。

遠出をすることになった主人。しかし、酒好きな冠者たちは、自分の留守をいいことに酒を盗んで飲んでしまうだろう…。主人は二人を縛り付けて外出することを思いつきますが、次郎冠者はなかなか腕の立つ男。そこでお調子者の太郎冠者をだまし、次郎冠者を縛り付ける案を出させます。次郎冠者は、得意の棒術の披露をして調子に乗っているところを太郎冠者に縛られてしましますが、その太郎冠者もまんまと主人に縛られる始末。それでも酒を飲みたい二人は、縛られながらも巧みに酒を酌み交わします。そこに帰ってきた主人が盃に映りこみ…。パフォーマンスが大胆で、狂言初心者におすすめの一曲です。

みどころ

なんといっても縛られたまま二人で酒を酌み交わすシーンが見せ場ですが、実は、移り変わる人間関係も見所です。最初、太郎冠者は主人と結託し、腕に覚えのある次郎冠者を捕えます。二人とも縛られると協力し合い酒を飲むことに。主人にばれるとお互い罪をなすりつけ合いますが、最後にはまた太郎冠者と次郎冠者が手を組んで主人を追い回すのです。おもしろい台詞や仕草などで笑いに満ちた狂言ですが、人間関係についてのシビアな視線も隠されているのです。



ココがすごいよ!

狂言的「笑い」の世界

「型にはまっておもしろくない」とはよく使う言葉。でも、狂言は舞い方も台詞のタイミングもすべてが決まっている、まさに「型」でできた芸能なんです。じゃあ型どおりでおもしろくないのかというと、しっかり笑ってしまうのが狂言の不思議なところ。言葉も現代語ではないのでわかりにくいのに、どうして笑ってしまうのか。そこには奥深く、狂言にしかない「笑い」の世界があるので。

笑わせようとしてはいけない?

現在、2つある狂言の流派のひとつ、大蔵流最古の台本の作者・大蔵虎明は、要約するとこんなことを書いています。「おもしろい顔や、普通の人はしない変な動きで笑わ

せようとするのは、たとえ観客が喜んでもやっちゃダメ」。変な顔やしぐさで笑わせようとするといつか飽きられてしまうし、「おもしろいことをする芸人」という特別な人を観る芸能になってしまう。狂言の最大の魅力は、「おもわず共感してしまう、どこにでもありそうな滑稽さ」。歌が得意な太郎冠者が、「お客が来るたびに歌えと主人から言われるのは面倒だー。そうだ、ひざ枕じゃないと歌えないって言っちゃおう」(『寝音曲』)とか、「酒を飲むなどと言われると飲みたくなるんだよね」(『棒縛』)というような、「人間ってヤツは、これだから」とついつい微笑んでしまうのが狂言の笑いなんです。

狂言には悪人が出てこない?

狂言は「人を風刺する笑い」のほかに、酔ったしぐさを舞うような「滑

稽な笑い」、見ているだけで、つられて笑顔になるおめでたい「祝言の笑い」があります。たくさん笑いの種類で魅せてくれる狂言ですが、共通するのは「悪人」が出てこないこと。詐欺師やわがままなお金持ちは登場しますが、結局は改心したり、懲らしめられたりと、最後には悪いものを「笑い」で包み込もうします。狂言が確立した背景には、戦国の動乱や飢饉などの波乱がありました。その中で、どんな立場の人でも元気づけられる芸能へと発展していきました。狂言は、笑った後に笑い以外の何かを心に残してくれる、心にしみる伝統芸能なのです。



知っておいても損はなし

狂言用語集

わかりやすい狂言ですが、知らない言葉も多いもの。まずはこの用語集で知ったつもりに。

【語り(かたり)】

狂言師に求められる舞、謡と並んで、重要な要素のひとつです。ひとりの演者が、本狂言や間狂言の中でまとまった物語を抑揚をつけて語ること。

【謡(うたい)】

能・狂言の中でフシをつけてうたわれる言葉。

【小舞(こまい)】

狂言小舞。狂言の中の、舞の部分だけを指し、紋付袴姿で独立した演目としても演じられます。

【狂言足袋(きょうげんたび)】

狂言方が履く足袋で、黄色と白の縞または黄色無地の足袋。昔、能楽師は鹿皮を白く仕立てた高価なものを履いていましたがワンランク低く見られていた狂言師は鹿皮そのままの茶色の足袋を履いていた名残なんだそう。

【直面(ひためん)】

面をつけない、素顔のこと。ただし、面をつけていないだけで、「素顔」という人間らしい面をつけている意味を持っています。

【わわしい女】

騒がしい、うるさい女。女房役として出てきた女役によく使われます(ひどい…)。

【しわい人】

けちな人。陰で悪口を言う時に使います…。

【こんにった】

台詞で、目上の人に対して「今日は」の意味で使う言葉。昔は丁寧な言葉だったようです。

【すっぱ】

詐欺師。田舎者が都へ買い物に出かけて都の「すっぱ」に騙されると言うお話が狂言には多く出てきます。

【お酒を注ぐ音】

「ドブ、ドブ、ドブ」

【蔵の扉を開ける音】

「グワラ、グワラ、グワラ」

【軽い玄閤の戸を開ける音】

「サラサラサラ」

【犬の鳴き声】

「ビョーッ、ビョーッ、ビョーッ」

【鐘の音】

「ジャンモン、モンモンモンモン…」

これも知っ得? 狂言の擬音 あれこれ

狂言では演目中の効果音を演者がセリフの一部として表現します。聞きなれた音が狂言の中では意外な言葉で表現されるものも…

※用語集をみてみよう。